

2004年5月23日(日)に二本松訓練所で教員の現職参加の候補生にお話をする機会がありました。訓練所に連絡がいったのはなんと1週間前であったそうですが、現職参加の候補生を中心に20人くらいに集っていただきました。私は写真等を見てもらいながら自分の体験を通してお話させていただきました。要約すると・・・

「私の活動先は、ウガンダの小学校教員養成学校だったのですが、同僚達の休みが多く、時間割無視、年間計画がなく行き当たりばったりの学校運営に最初は失望しました。しかし、半年くらいして授業にも自信がつくようになると、自習用のプリント作り、黒板の修理、本棚作り・図書室の整備やサイエンスフェア(理科の発表会)、生徒へのコンピュータの指導、ゴミ捨て場の穴掘りなど、どんどんアイデアが出てきて、自分で思いついた活動をするようになりました。職員会議で反対されたり進まなかった計画もありましたが、生徒達が手伝ってくれるようになり、最終的には同僚や生徒達を触発することができたと満足しています。活動先の状況、現場で何を求められるか、何ができるか行ってみなければわからないので、事前の情報は参考程度にして、広く浅くいろいろなことに対応できるように準備したほうがいいと思います。私は、日本では工業(情報技術)を教えていたので、理科や数学は大きな挑戦でした。でもそれ以上に、予想外のことでしたが学校の環境整備のために大工さんのような日々を送ったことは、私にとっても、同僚、生徒達にとっても貴重な経験となったことでしょう。自分の専門性を生かせずに、最初は失望することがあるかもしれませんが、日本での教員の経験が思いもかけない形で現地で役に立つこともあり、新しい自分を発見できるかもしれません。自分の職種や要請内容以外のことで出来ることはいくらでもあります。自分を信じて自由にのびのびと活動してきてください。」

自分の活動の話ばかりになってしまいましたが、活動の具体的なイメージをもってもらうことができたと思います。いろいろな国、いろいろな職種の候補生のために、役立つような話をするのは非常に難しいなあと思いました。

自分にとっても、活動を振り返るよい機会になりました。ありがとうございました。その後の懇談では、やはり、コンピュータやインターネットが現地で利用できるかどうかに関心が集まりました。国や地域によって違うので断定できませんが、ウガンダの場合、少なくとも首都や都会に出ればインターネットカフェがありますし、ノートパソコンを持っていけばLANケーブルをつないでくれる店もあります。活動に関係することは協力隊事務所のパソコンを使わせてもらいました。自分で電話線を契約して家でインターネットを使っている隊員もいましたが、通信速度はそんなに速くありません。8~30キロくらいだったと聞いています。(日本でモデムを使った場合56キロ)。ソネットに入っていると多くの国でローミング・サービスが使えることも紹介させていただきました。

話の要旨：各自の経験、活動内容、現地でのとまどいとその克服、アドバイス、心構え、準備しておいた方がよいこと等。私の場合は、小学校教員養成学校だったが、最初は同僚達の休みが多く、時間割を無視したりすることに失望したが、授業の他、図書室の整備や

サイエンスフェア(理科の発表会)、生徒へのコンピュータの指導など自分で思いついた活動をするようになり、同僚や生徒達を触発することができた満足している。現場で何を求められるか、何ができるか行ってみなければわからないので、事前の情報は参考程度にして、広く浅くいろいろなことに対応できるように準備したほうがいいと思う。日本の学校や普通の生活の写真やビデオ等は役立つと思う。自分の趣味や得意なことは、絶対に喜ばれるので、準備しておくべき。

ウガンダでの活動を振り返って

14-1 理数科教師
三野 光雄

話の詳細（原稿）:

まず最初にお話ししなければならないことは、帰国隊員の話や現地の情報また、要請内容等事前の情報は、参考程度にしておいた方がよいということです。

現地で何が求められ何ができるかは、行ってみなければわかりません。例えば、同じ国（ウガンダ）の学校といっても、コンピュータの整備された設備が充実した学校もあれば、バラック小屋のような教室で授業をしている学校もあります。どんな学校に配属になるかわからないし、任国に着いてから予定されていたのとは別の学校に行くことになる場合もあります。教員の異動等で、聞いていたのとは違う教科を教えなければならない場合も考えられます。学校現場でなく教育委員会で活動する隊員もいました。その隊員は授業をすることなく、学校を回ってはトイレの衛生指導をしていました。



（コンピュータ教室 ウガンダ）



（理科室のある高校 タンザニア）



（貧しい小学校 ウガンダ）



（1クラス 80人 - ウガンダ）

生活も都市部と村では大違いです。私の場合は、家に電気が通っていると聞いていましたが、6ヶ月のあいだ電気のない生活をする事になりました。

行ってみなければわからない国だから行く価値があるし、予定どおりに事が進まない国だから思わぬことが役にたつ場合があると思います。これは私の考えですが、現職あるいは社会経験のある人は、協力隊を仕事の延長としてとらえて、決められたことを完全にやろうとしますが、活動先や同僚への不満で活動が苦しくなりがちです。相手の状況に合わせて自分のできることをするという少し楽なスタンスの方がいろいろなアイデアが出て日本での経験や能力が活かせると思います。

職種や要請内容にこだわらずに、広く浅くいろいろなことに対応できるように準備したほうが良いと思う。日本の学校や普通の生活の写真やビデオ等は役立つと思います。自分の趣味や得意なことは、絶対に喜ばれるので、準備しておくべきでしょう。

日本での協力者を作っておくことも大事でしょう。本や教材を送ってもらったり、任国と日本の生徒達との交流を手伝ってくれる人を前もって見つけておいて、お願いしておくとうまく進むでしょう。

0 . 自己紹介

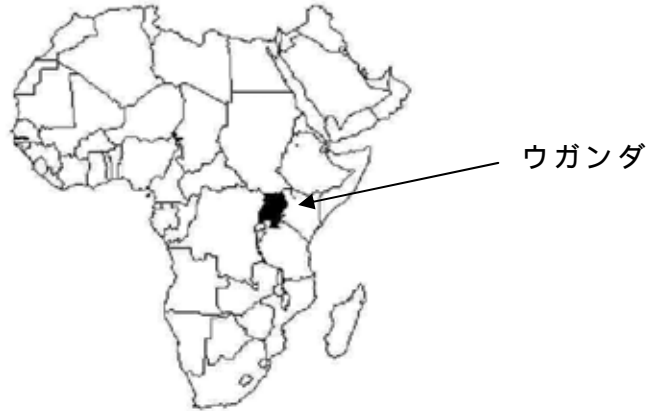


(家族に見送られての出発風景)

2002年7月から2004年3月までの約1年9ヶ月間、日本を離れ青年海外協力隊員として活動してきました。年齢制限ぎりぎりの39才で青年海外協力隊に応募し、活動していた時は40才から41才にかけてでした。大きな病気もせず、若さにまかせて(?)できるだけのことはしてきたつもりです。実際、日本に帰ってから、行く前よりも若返ったとよく言われています。

私は現職参加だったので、現在は元の職場(大阪府立成城工業高等学校情報技術科)に戻ってコンピュータを教えています。現地での職種は理数科教師でした。

1. 学校の様子



私の活動先はウガンダ共和国でした。ウガンダはアフリカの東側にあります。ビクトリア湖に面し、ナイル川の源流があることでも有名です。赤道直下にあるにもかかわらず、1000メートル以上の高地のため、一年中春のような快適な気候です。ウガンダでは食糧難こそありませんが、貧困とエイズ問題をかかえて、国家財政は各国の援助にたよっているというのが実情です。



(配属先の学校の様子)



(工事が中止になり完成していない)



(教室の中)



(講堂では200人の生徒に講義)



(青空教室)



(1クラス80人)



(私が教えています)

私は、そのウガンダの小学校教員養成学校で、将来小学校の教員になるために勉強している 18 才から 35 才くらいまでの生徒に数学と理科を教えていました。生徒数は 1 年生と 2 年生合わせて 360 人、教員数は校長以下 14 人でした。

学校に行くと、いきなり「授業をやってくれ」と言われました。私は「待ってください。学期が何月に始まって、いつまでかも知らないし、授業の内容も計画も、時間割も、何もわからないので。」と言って、しばらくは、学校の様子を観察させてもらうことにしました。校長や教頭からは、そういった説明はなく、私は同僚に質問しながらわかってきました。質問すればいいに教えてくれます。行事の計画も授業の計画もほとんど決まってないと言うことでした。各自の好きなところを好きなように教える。生徒集会が必要と思えば、その先生が勝手に生徒を集めるようです。時間割は守られていません。職員室にはいつも 5 人くらい来ています。あとの人は来たり来なかったりでした。

時間割の先生が来ないで生徒達が自習してたり、違う先生が授業をしていたりです。そして一度授業を始めると 2 時間、3 時間と授業を続けます。ずっと休んでいた先生が久しぶりに来ると、時間割を無視して、割り込み自分の授業をかってにやっています。そんなわけで、シラバスを終えることがない教科もありながら、生徒達は教員免許の国家試験にのぞみます。

約 2 週間、同僚達に頼んでいろいろな科目の授業を見せてもらいました。1 クラス 80 人 ~ 100 人で、授業の方法はディクテーション (聞き取り) です。先生がしゃべったことを生徒達がノートに書きます。絵や図をあまり書かずに、ひたすら文章を伝達していました。生徒達は教科書を持っていません。ノートが教科書になります。そして彼らは全てを丸暗記します。例えば「ピタゴラスの定理：直角三角形の



(黒板の図を正確に写せない)

斜辺の平方は他の 2 辺の平方の和に等しい」と覚えています。覚えていますが、どれが斜辺かわからないので実際に問題を解くことは難しいのです。理科でも実験などは行なわれていない状態でした。数学や理科が苦手な生徒が多いことはウガンダの教育の大きな問題点です。数学や理科の苦手な教師が教え、子供たちは数学や理科を嫌いになっていきます。そして、そういう子供たちの中から次の教師が出るという悪循環が繰り返されています。数学や理科です

ら暗記中心の教育になってしまっています。

学校の図書室は本をつめたダンボールを積み上げただけの倉庫のような状態でした。せっかくある本を活用できていません。

このように前もっての行事計画がない、時間割を守らない、教員の出勤率が低く自習が多いなどの問題をかかえており、日本の学校とは大違いでした。のんびりした国民性に加えて人員の不足と資金の不足から、教育環境や授業内容の改善が進まず「しかたがない」という言葉で計画が先送りにされることが多々ありました。「こんなの学校じゃない。努力という言葉を知らないのか。」と言いたいところですが、私はそういう学校に来てしまったのです。さあ、そこで何ができるのでしょうか？

2. 活動について

最初は同僚の授業を見せてもらい、学校と言葉（英語）に慣れていきました。あいた時間には私は小学校の教科書からノートをとりながら読んで勉強しました。これは非常によい勉強になりました。生徒達に小学校のレベルから教えなければならなかったからです。授業をしてみると、生徒たちの基本事項の理解度の低さと教員免許国家試験のレベルの高さのギャップ、そして1クラス100人の授業に苦しみました。中学校で物理・化学を習っていない生徒も多く、週2～3時間の授業で小学校・中学校の範囲と教員免許の国家試験対策まで教えなければなりません。100人の生徒達を前に予備校の講師になったようなプレッシャーを感じながら授業をしていました。意気込んで教室に行くと、今日は全校集会だ、サッカーの試合があるから授業がないとか、身分証明書の写真撮影だ、献血の日だとかいうことが何度もありました。教育自習で6週間その上準備に2週間も授業がとんだりしました。どうして、前もって言ってくれないのだろうと悔しく思いました。私には彼らの「あうん」の呼吸は分かりません。授業は遅れに遅れてしまい、1年目は授業で予定した範囲を終えることができませんでした。しかも生徒達は勉強したくても教科書をもっていない。結局、学年末に講義録（ハンドアウト）を生徒に配布し、授業でカバーできなかったところは各自で自習してもらうことにしました。



（私の授業風景）



（実験を見せながらの授業 手作りの検電器）

17. Energy-3

(4) Light Energy is form of energy emitted by luminous objects like the sun, visible part of the electromagnetic spectrum

- **Spectrum** (Spectral colours) The solar spectrum disperses in order of increasing frequency: red, orange, yellow, green, blue, indigo, violet

White light is mixture of spectral colour

- **Primary Colours** : Red, Green, Blue

Our eyes detect three primary colours and our brain recognise **secondary colours**

eg, yellow = R + G, magenta = B + R, cyan (peacock blue) = G + B, white = R+G+B

- **Luminous objects** emit visible light. **Non-luminous** objects produce no light. But we can see them because of reflected light from luminous objects.

(a) White object reflects all spectrum of light.

(b) If an object absorbs all spectrum of light and no reflection, it is black. (c) An object which reflects R and G and absorbs B spectrum is yellow.

Light travels in straight line.

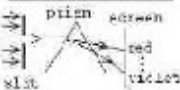
- Light travels very fast. **Light speed: 300,000 km/s**

- Light travels 7.5 times going around the earth in a second.

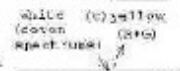
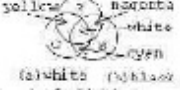
- Light can travel through a vacuum.

- Light behave like a wave but the other time like a stream of particles.

Dispersion of light



Additive mixing



5 colors absorbed

23. The earth-1

(1) Characteristics of the Earth

Shape: The earth is curved (not flat) because when a ship goes away, its body disappears and you can see only the sea's before it completely goes out.

The earth is like a sphere, but slightly flattened at the poles.

Size: The radius is about 6,400 km, its circumference is about 40,000 km.

Spin: The earth turns (rotates) on its axis. It takes 24 hours for one complete turns. That is why the sun, moon, stars seem to go around us every day. Also **day & night** are caused by this rotation of the earth on its axis.

Revolution: The earth goes around the sun (The earth is the 3rd nearest planet from the sun). It takes 365.26 days to orbit the sun completely.

The **leap year** has an extra day to adjust the 365-day calculation. The earth moves on its orbit, the earth's axis leans at an angle of 23.5°. This causes seasons every year on the earth.

Location: A point on the earth's surface are defined by latitude and longitude. The **latitude** is its distance from the equator in degrees (north or south). The **longitude** is the distance around the earth's circumference in degrees east or west. The **sea level** is its distance from sea level.

Sun face: The sun face looks black because 75% of its surface is covered



(理科のハンドアウト - No.17 光)

(理科のハンドアウト - No.23 地球)

私の活動も 2 年目にはいりました。同僚や校長と人間関係ができ、日頃から学校の問題点を話し合い、職員会議でも発言するように努力しました。「時間割を守りましょう。休む時は、課題を与えるか他の先生にお願いしましょう。行事予定は早い目に決めて、情報をみんなで共有しましょう。」と訴えました。また、職員室に黒板を設置し、情報の共有に役だてました。自分でも「何か行事の予定はありますか」と聞いては、職員室の黒板に書くようにしました。これで活動の計画がたてやすくなりました。

毎回の授業で実験を見せたり、模型や図を示しながら教えるようにしました。また、学校でサイエンス・フェアを企画運営しました。これは、生徒たちのグループが自主的な研究や実験を発表する学園祭のようなもので、大成功に終え好評でした。すると次の学期には、同僚が中心となりマス(数学)フェアをするようになりました。





サイエンスフェアより
 A.土の研究、B.人体の研究、C.手作りの天びん、
 D.ボルタの電池、E.蛙の解剖、F.土の pH 測定、
 マスフェアより
 G.そろばんと十進数、
 H.円の面積

教科指導以外では、生徒と一緒にゴミ捨て穴を掘ったり、黒板塗り、本棚の製作などをしていました。中でも、図書室の整備は大きな成果をあげました。それまでは本や理科の実験器具がダンボールに入ったまま積み上げられていたのですが、本棚を製作し、本を並べ、生徒達が本を読んだり借りることができるようになりました。理科のロッカーも作り、数年間校長室にしまわれていた顕微鏡も活用されるようになりました。また、コンピュータ 3 台を借りて、放課後生徒達にコンピュータを教えました。日本のビデオを見せたり、日本の文通相手の紹介もしました。

(黒板製作風景)



(以前の図書室)



(箱詰めの本がいっぱいだった)



(本棚の製作 - 木材の切断)



(生徒たちが手伝ってくれました)



(完成した図書室)



(理科実験器具用
ロッカーも製作)



(放課後生徒どうしでコンピュータを教えているところ)

自分で思いついた活動をするようになり、自分でも楽しかったし、同僚や生徒達を触発することができたと満足しています。私は、いろいろなことをやりすぎたのかもしれませんが、私がいなくなってから、残された同僚や生徒達が自分で何かすこしでも学校をよくするために努力し始めることを期待しています。

3. 生活について

私は首都(カンパラ)から、乗合タクシーで1時間半のところに住んでいました。家は、学校の近くにある長屋でした。近所の人達は親切で、小さな子供達が多くにぎやかだったので、さびしく思ったことはありませんでした。

ポットン式のトイレが外にありましたので、夜トイレに行かなくてもすむように注意していました。私の家には水道が来てなかったのですが、近所の人から水道水を買っていました。風呂は2日に1回タライで水あび程度。電気は来ていましたが、テレビや冷蔵庫などは持っていませんでした。電気は途中の6ヶ月間は止まっていました。そう聞くと不便に思わ

れるかも知れませんが、慣れてしまえば何ともありませんでした。今にも降ってきそうな星を眺めていると、暗い中でも物が見えるようになってくるから不思議です。石油ランプをともし、ラジオを聞きながら、本を読んだり考えごとをしたりしていました。パソコンの内蔵バッテリーを4本とバッテリー駆動のプリンタを持っていたので、停電の時でも家で仕事をすることができました。

学校で出る食事は昼も夜もポショでした。これはメイズ(トウモロコシのようなもの)の粉を炊いた柔らかい餅のようなものでした。毎日これではあきるので、私は時々外に食べに行ったりしていました。ポショやマトケ(食用バナナを蒸したもの)やライスと鶏や牛やヤギ肉のスープがウガンダの一般的な食事です。キャベツのないお好み焼きのようなチャパティは安くて食べやすいので、よく露店で買い食いしていました。週1回程度は町や首都に出て他の協力隊員とレストランで食事をしたり、日本の料理を作ってパーティをしていました。週1回くらい自分で料理をして近所の人達と食べていました。炭や木を燃やして米を炊いたり、カレーやオムレツ親子丼、お好み焼きなどを作っていました。彼らも日本風の料理はおいしいと言ってくれました。

近所の高校生ポールとサムの兄弟と仲良くなり、彼にいつも助けてもらっていました。彼らはお金に困っていたので、私の家に住んで掃除と洗濯のアルバイトをしていましたが、彼らよりも私のほうが助かりました。また、活動先の同僚にも公私にわたって世話になり助けてもらったおかげで、生活を楽しむことができました。

4. 最後に

3ヶ月の日本での訓練、ウガンダでさらに1ヶ月の訓練、安全対策や健康管理などの世話をしてくれるウガンダ青年協力隊調整員やスタッフ、面倒見のいい先輩隊員、そして、日本人会の皆さんがいたおかげで、ウガンダでの生活になじむことができたと感謝しています。とても自分一人では、海外で活動することなんてできなかつたと思います。私の活動は、守られた中でのものでした。その意味で、NGOや個人で海外の活動をしている人は偉いなあと尊敬します。

しかし、私にとってはかけがえのない貴重な経験でした。充実した時間を過ごすことができ、成果を残すことができました。マニュアル的な対応では活動はうまくいきません。その時その時に考え行動することが求められました。形式論ではなく、臨機応変、柔軟な対応ができるようになりました。

「協力隊はゴールではなくスタートである」とある人が言っていました。今後私のできる活動を続けていきたいと考えています。

また、活動において、専門的な経験や技術よりも相手にやる気をおこさせることが求められていた気がします。やろうと思えば、やれることは一杯ありました。しかし、自分に技術があったとしても全部自分だけでやってしまえば、自分がいなくなってから活動先が困ってしまうこととなります。相手に分かってもらうこと、待つこと、そして、一緒にや

ることが必要です。人々との人間関係が大切です。私の場合は、率先して色々な取り組みを行ない、それを見てもらうという形でしたが、同僚の教員や将来教員になる生徒達が、「あきらめずにやってみよう」と思うようになれば大成功であると思っています。形として残るかどうかよりも、人々の行動なり考え方にどのような変化がおきたかが重要だと思います。協力隊の活動は、広い意味での教育であると言えるのではないのでしょうか。物を与えることが援助ではない。自分達で解決できるように見守っていかなければならない。そのためには、私達をもっと相手を尊敬し、信頼することが必要です。決して自分が偉いわけではない。これは人間関係の基本ですよね。

近所の人々の生活を見ていて、悪く言えば向上心がないのですが、別の見方をすれば、今のままだも十分という人々の生き方に感心しました。厳しい現実を受け入れ、笑いながら忘れていく。金があれば使う。金がなくなれば借りればいい。人間は物がなくても幸せになれる、そして、生きていくこと自体が素晴らしいということに気がつきました。平凡な1日1日が幸福。他人との競争にあくせくしない生き方もあるんだと感動しました。でも、これは中間層の人々の暮らしです。エイズ孤児、ストリート・チルドレンなど貧困層の問題は深刻です。彼らは決して幸せではありません。しかし、なすすべがないのです。

あきらめていては、人々の生活は向上しないし、経済も発展しません。お金を稼ぐには、働くしかないのです。仕事のない人々がたくさんいる一方で金持ちやエリートもいます。そして、彼らは本当によく働きます。いずれウガンダも競争社会になっていくでしょう。経済の立て直しのために工業化していくでしょう。その時に、貧困層の人々は救われるのでしょうか？それとも一部の人だけが裕福になるだけなのでしょうか？政治の安定が非常に大切です。

自然に恵まれたウガンダ。アフリカの真珠といわれたウガンダ。独立後、政変・内乱が続いたウガンダ。政治的に安定してきたウガンダ。しかし、国家予算の半分以上が外国の援助で成り立っているウガンダ。エイズ対策、初等教育の機会均等に取り組んでいるウガンダ。しかし、ワイロや職権乱用のあるウガンダ。貧富の差が大きいウガンダ。貧しい人が多いウガンダ。でも、親切な人が多いウガンダ。私の友達がいるウガンダ。・・・私の好きなウガンダ。でも、課題がいっぱいあるウガンダ。

今後もウガンダの人々とのつながりを深めていき、何かできることがあれば協力したいと考えています。機会があれば、生徒達に私の経験をお話したり、教材開発や隊員の活動を支援していくつもりです。

異なった文化をもった人と人々が協力するとき、お互いに影響しあって、思いもかけない効果あらわれるものです。特に若い人は、自分の視野を広げるためにもどんどん海外に出て欲しいと思います。また、日本にいても異なった文化あるいは価値観を持つ人々と関わることはできます。そうする中で、今まで当たり前と思っていたことが当たり前でない「へー」という体験をしましょう。先入観や偏見にとらわれないで、自分とは違うタイプの人と協力できるような人間になりたいと思うようになったことは私の財産です。

以上、ありがとうございました。



(家の付近 - ケニヤに続く道)



(ウガンダの夕日)